

2021年11月14日（日）聖霊降臨後第25主日
銀座教会 家庭礼拝

礼拝招詞 「神の子らよ、主に帰せよ。栄光と力を主に帰せよ

御名の栄光を主に帰せよ。聖なる輝きに満ちる主にひれ伏せ。」

詩編29編1～2節

主の祈り

交読詩編 詩編77編13～16節

あなたの働きをひとつひとつ口ずさみながら

あなたの御業を思いめぐらします。

神よ、あなたの聖なる道を思えば

あなたのようにすぐれた神はあるでしょうか。

あなたは奇跡を行われる神

諸国の民の中に御力を示されました。

御腕をもって御自分の民を

ヤコブとヨセフの子らを贖われました。

使徒信条

讚美歌 153 わがたまよ、きけ

聖書 マルコによる福音書 10章35～45節

10:35 ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが。」36 イエスが、「何をしてほしいのか」と言われると、37 二人は言った。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」38 イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっているか。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか。」39 彼らが、「できます」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる。40 しかし、わたしの右や左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、定められた人々に許されるのだ。」41 ほかの十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めた。42 そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。43 しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、44 いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。45 人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の

命を献げるために来たのである。」

牧会祈祷

天の父なる神様、過ぎる1週間の上に与えられたあなたの導きに感謝いたします。私たちがあなたの栄光を曇らせるような時も、あなたはご自分の御顔の光によって絶えず私たちを照らし、主の復活の礼拝に私たちを導いてくださいました。この礼拝によってあなたのみ栄を受けた私たちが地の塩、世の光として、それぞれの場所で役割を果たすことができるようにしてください。季節の変わり目にあって、私たちの健康をお守りください。子供たちの健やかな成長をお守りください。先の主日には召天者記念礼拝が守られました。私たちが信仰の先達たちと共に復活の主の栄光の内に生かされていることに感謝いたします。教会の上に与えられている測り知ることのできない神様の愛に生かされつつ、献身の歩みを送らせてください。この祈りを主イエス・キリストの御名によって御前におささげいたします。

アーメン。

説教 「ほんとうの栄光」

伝道師 藤田 健太

主イエスの「死と復活」の三度目の予告の後、ゼベダイの子であるヤコブとヨハネが進み出ました。その直前の箇所では二人の兄弟が登場するのは9章2節以下の「山上の変貌」の箇所です。主イエスはなぜか、「ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた」とあります。そこで一行は、真っ白に輝き、エリヤとモーセと語り合うイエスの姿を目の当たりにしたのです。物語の流れから見て、本日の兄弟たちの行動が、あの山の上での出来事によって引き起こされたことと解釈することは自然であると思います。主の山上の変貌を目の当たりにして、兄弟がある強烈な確信を受けたことは疑いありません。彼らの先生であるイエスがそこでまことの神の栄光に満たされていました。そして兄弟はただペトロと自分たちだけが、他の弟子たちから選り分けられ、その場所に連れて来られた意味を考えました。そこで兄弟たちが、自分たちの特別な選り分けと招きを信ずるに至ったとしてもなんら不思議ではありませんでした。自分たちは主から特別に選ばれた存在として秘密を開示されたのであり、主と同じ栄光を受けるため他の弟子たちから選り分けられたのではないか。37節「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください」という願いは、一連の出来事の結果、彼らが抱いた確信がどのような内容であったかをはっきり伝えています。

ゼベダイ子らの確信はある面で当たっていましたが、根本的な誤りを含んでいました。確かに彼らは主の「栄光」に招かれました。しかし「栄光」に関するあ

やまれる理解がそこにありました。彼らが期待し、思い描いた栄光は、主が繰り返し弟子たちに対してお語りになった栄光とは違ったものでした。主が物語の最後の場面でご指摘になられたように、彼らが理解した栄光とは「異邦人の間」にあるような栄光でした。そこで直ちに思い浮かんだのは、当時、ユダとガリラヤを支配していたローマ帝国のピラミッド型の権力構造でした。ユダとガリラヤの人々は「異邦人」である為政者たちの権威を恐れると共に、ある面ではそれを軽蔑していました。自分たちの上に立つのはただ神のみであるという自己理解があったからです。弟子たちが主に期待している栄光は、異邦人たちの受ける栄光と何ら変わるものでないことを、主はご指摘になられました。そんな栄光とは比較にならないほど輝かしい栄光があることをお伝えになりました。しかし、その栄光に与る道とはどのような道であるかをもお教えになりました。

8章31節以来、主が繰り返しお語りになってきたように、まことの神の栄光とは「復活の栄光」のことでした。それは、「多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活する」という栄光でした（マルコ8章31節）。この世の栄達とはほど遠い所にある栄光でした。人間によってではなく、ただ神によってのみ授けられ、神の目によってのみそれと認められる栄光でした。主の山上の変貌も、そのような復活の栄光を伝えるための出来事でした。ペトロとゼベダイの子らは確かに弟子たちに先立って、この栄光を垣間見る機会を得ました。しかし、それは彼らが思い描くような人間の世界の輝かしい栄光を意味していなかったのです。人間の世界の栄光とは比較にならないただ一つの栄光への招きでありましたが、それはただ、神を神とする人によってのみ、それと分かる栄光でありました。

「あなたがたは、自分が何を願っているのか、分かっていない」と主は言われます。「このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか」と主は問われます。主が飲む杯とはローマの権力者たちがおおぐ「祝杯」ではありませんでした。そのような権力者を含め、全ての人たちのため御子がおおぐ「神の怒りの杯」のことでした。主と同じ「洗礼」を受けることは、キリストの「死」に与り、キリストに倣う者として新たな命を歩み出すことでした。その意味するところを知っていたならば、彼らはこんなにも軽はずみな申し出をすることは決してなかったことでしょう。

ゼベダイの子らの申し出の別のポイントは彼らの提案が弟子たちの内に分裂をもたらすものであったことです。「ほかの十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立てはじめた。」弟子たちの分裂はまことの神の栄光とはなじまないものでした。本日の物語は、登場人物の違いによって4つの場面に区切ることができるでしょう。35節「ヤコブとヨハネのお願い」、41節「ほかの十人の弟子たちの反応」、42節「一同を呼び寄せる主」、45節「人の子である主ご自身による総括」です。二人と十人に分裂した弟子たちを、主は再び「一同」

としてお招きになるのです。神の栄光を受けたい人は、「皆に仕える者になり」、「すべての人の僕になりなさい」とお命じになるのです。人間の栄光は他の人々を切り離すことによって成り立ちます。しかし、神の栄光は他の人々と結びつくことによってのみ成り立つことをはっきりお示しになったのです。互いに仕え合う兄弟姉妹がいることで、神の栄光ははじめてまことの光りを放つからです。そして最後に御子自らがそのような栄光の模範となることを示されました。すなわち、十字架の死と復活の予告です。

まことの神の栄光は復活の主を信じる信仰に生かされる教会の群れの中で、光輝きます。神を礼拝し、愛の交わりをもつ私たちの間に神の栄光が輝いているのです。「先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる」のはローマ式のピラミッド型の人間関係になじんだ人々の心に苛立ちを起させます。私たちは自らが後になることによって、怒りや不安を抱いてはいないでしょうか。そのような価値観の束縛から私たちを解き放つ自由への招待が主によって語られています。「いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。」主は「いちばん上になりたい」者たちの思いを一概に否定してはいません。そのような私たちの思いを生かし、導く、正しい道のりを、キリストを信じる人々の群れに向けて教えて下さっているのです。

祈り 天の父なる神様、私たちにまことの神の栄光を知らせてくださりありがとうございます。神様の栄光が教会の群れにあってまことの輝きを帯びることを知らされました。どうぞ、私たちが互いに復活の主の栄光を映し出す鏡として、互いを愛し、互いに仕え合い、主のみ栄を知らせていくことができますように。今週1週間の歩みをお守りください。わたしたちの主イエス・キリストの御名によって、お祈りいたします。 アーメン。

讚美歌 3 5 7 ちからのみかみよ

献 金

頌 栄 5 4 4

祝 禱

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、
あなたがた一同と共にあるように。

アーメン